

パウリーノ・ベルナベ一世

志村 良知

昨年十一月、齢七十六歳でギターを替えた。

前のギターは大学の入学祝で、国産ながら手造りの高級品であった。しかし、五十年を越える歳月から磨耗や狂い、高音の伸び方、低音弦の響き方、ビビリなどが気になるようになってきた。修理・調整に出したらかなりの金額がかかるであろうし、それで満足いく音になるという保証もない。

そんな話をギター仲間としていたら、ある日、その内の一人から電話がかかってきた。「師匠のプロギタリストN先生が若き日のスペイン留学時に入手、コンサートやCD録音にも使っていた楽器を手放すというが引き受けないか、次のオーナーに手渡しできればそれが一番良いと言っている」というものだった。金額は、〇十万円、覚悟の範囲内だ。「分かった。受ける」と即答した。

その楽器はマドリッドのパウリーノ・ベルナベ一世作。ベルナベ一世は『禁じられた遊び』のギタリスト、ナルシソ・イエペスの十弦ギターを作った名工である。

十一月のある日、紹介してくれた友人の車で先生のご自宅に伺い、手渡しでベルナベを受け取った。

一九八五年製のその楽器は、四十年間プロに使い込まれて表面は傷だらけだが、きちんと調整されていて狂いなどない。手に取ると明らかに普通より重い。先生によると内部構造が特別であるせいだという。「何か弾いてみる」と友人がけしかける。先生も「弾いて音を確認してみて」とおっしゃる。意を決しここは景気よく、と弾きなれた二長調の小品を弾く。ベルナベの高音は綺麗に伸び、低音は柔らかいが迫力を以って響く。先生は「それだけ思い切った音を出して弾いてくれるなら譲り甲斐がある」と褒めて下さる。

さて、我がものとなったベルナベ、聴く人みんなが「良い音」と褒めてくれる。自分も腕が上がった気分になる。ただ、先生が手放す理由の一つとして挙げた「高温では響きが悪くなる」というのは、私の腕と耳でも感ずるものなのか夏になってみないとわからない。

(Feb 13 2025)